
並木道の人影

魅覇鎖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

並木道の人影

【Nコード】

N3403V

【作者名】

魅霸鎖

【あらすじ】

未来から帰ってきたツナ達は、いつものように並木から下校する。だが、その途中で並木道に迷い込み…。

「でなく、それでその一年坊のおかげで、勝てたわけなのな！」

「そうなんだ…良かったね。」

「おう！」

「十代目、野球馬鹿の野球話に付き合う必要なんか無いですよ！」

「おっ！獄寺、それって新しい駄洒落か？」

「なわけねーだろこのお気楽野郎！！」

「ま、まあまあ獄寺くん…」

ツナ達が未来から帰ってきて数日…。まるで未来での事が嘘のように平和な日々が過ぎていき、この日も沢田綱吉、獄寺隼人、山本武の三人は、並盛中からの帰路についていた。

「…あれ？」

「？ツナ？」

「十代目？」

三差路の、真ん中の道を三人が進もうとした時、ツナが立ち止まり、右側の道の方を不思議そうな顔で見た。

「ねえ二人とも…あんなところに、並木道ってあったっけ？」

「…は？」

ツナに言われ、獄寺と山本もツナの視線の先を見る。その先には、彼等に見覚えの無い並木道が続いていた。

「…いや…オレは気付きましたでしたけど…てか、住宅地の真ん中

に並木道なんて……」

「そう……だよな……？」

（何だろっ……あの並木道……何か……怖い……）

ツナがそう思っている間に、山本がその並木道の方へ足を向けた。

「ちょ、山本!？」

「おい野球馬鹿!お前何を……」

「んー? わかんねえんだったら行ってみようぜ? ちよつとした探検みてえで、面白そうじゃねえか。」

「あ、山本、待って!」

「十代目! オレも行きます!」

山本を先頭に、三人はその見慣れない並木道へと足を踏み入れる。そこは左右に等間隔で街路樹が生えており、町の中とは思えないほどに静かだった。

「……何か……変な感じだな?」

「……ねえ山本……もう戻ろう? 何だか……ここ、変な感じがする……」

「えっ……本当ですか? 十代目。」

「うん……何だか、ここに居ちゃ……いけない気がする。」

「んー……じゃ、戻るか!」

山本がそう言うと、三人は踵を返し元来た道を戻ろうとする。だが、その足はすぐに止まった。先程までは確かに居なかった者が、道の真ん中に立っていたから。その者は黒いフード付きのローブを着ており、その顔は見えない。

「……え? いつの間に……」

「ツナ!」

「十代目！お下がりでください！！」

「え…二人とも？」

ツナを庇うように、山本と獄寺が前に出る。その並木道に立つ者は、何も持っていないかった手に、何処から出したのか分からない巨大な鎌を持った。

「…！？」

その瞬間、今までの戦闘で培われてきた彼等三人のカンが、この場に居てはまずいと、そう警告を発した。だが彼等は逃げず、リングとボンゴレ匣を出し、いつでも開匣出来るように構える。…その時、

「…汝等…」

「…！…」

黒いローブに包まれたその者の口から、唐突に言葉が発せられた。その無機質な、それでいて冷酷な声に、三人は背筋を震わせる。

「…どうやって…ここに来た…？」

「え…どうやって…って…」

「普通に…来ただけだよな？」

「ああ。こいつ…何言ってやがる？」

獄寺が言い終えるのと同時に、その者は手にした鎌を振りかざした。

「…！！…」

反射的に、三人は構える。だが、その者と彼等との距離は五メートルは少なくともあり、その鎌が届く範囲ではなかったので、彼等は

少し油断していた。だが、その油断がいけなかった。

「…ここに来られた以上、現へ帰す訳にはいかん…未来永劫…時空の狭間をさ迷うが良い!!」

その者はそう叫ぶと同時に鎌を振り下ろす。鎌そのものは、何にも当たらず空を切ったが、その振り下ろされた軌道と全く同じ裂け目が、三人の背後に現れた。

「!?何これ…え…う…うわぁ!!」

「ツナ!!」

「十代目!!」

その裂け目に一番近かったツナが、裂け目に飲み込まれ、それを追って山本と獄寺も裂け目の中に自ら飛び込む。三人の姿が完全に見えなくなったところで、裂け目は閉じた。

「…死んだか。時空の狭間に入った以上、二度と帰っては来れん。…しかし…あの指輪は…」

その者はそう呟くと、並木道の先へと進んでいった。…そして、道の先へとその姿が消えたと同時に、並木道も、姿を消した。

2（前書き）

言い忘れてました。この話では、物語の設定上ナッツ達は匣状態で
す。あしからず。

「……………」

(…どこだろう…うう…)

ツナの意識は、どことも分からぬ空間に一人、漂っていた。

(獄寺くん…山本…二人とも…どこ行つたの…?)

『キイイ…』

(…?ボンゴレ…リングが…)

ツナの視界は闇に閉ざされているにも関わらず、自分の指に嵌められたボンゴレリングが光っていると、ツナは何故か認識できた。

(…どうして…?何もしてないのに…)

ツナの身体が、優しいオレンジの光に包まれる。その時、ツナの闇に閉ざされた視界に、自分の身体を包んでいるのと同じ印象を受ける光が二つ、飛び込んできた。

(…く…でらくん…?山本…?)

一つは赤い光、もう一つは青い光。そしてツナの身体を包んでいるオレンジの光。三つの光は、闇の中を静かに漂いながら、ある一カ所へと向かっていた。

(…どこに…行くんだろう…?)

ツナの視界に、もう一つのオレンジの光が飛び込んで来た。その瞬間、赤い光と青い光が離れて行く。

（あ…獄寺くん…山本…）

手を伸ばそうにも、身体が動かない。二つの光は、どんどん離れて行く。

（獄寺くんっ…山本っ…！）

声が出ない、身体が動かない。ツナの中で、不安感がどんどん膨らむ。

（っ…！！）

「獄寺くん！山本っ…！」

ようやく声が出、ツナははっとして辺りを見定める。そこは、並盛とは明らかに違う町で、建物や地面はひび割れたり破損したりしていた。そんな中、ツナはそのひび割れた道路に寝そべっていたのだ。

「…ど…こ…？…どこ…？」

身体を起こしながら、そう呟く。辺りを見回しても、獄寺や山本の姿は無く、それどころか人の気配さえ感じられない。

「獄寺くん…？山本…？二人とも…どこに…」

立ち上がりながら、もう一度辺りを見回す。だが結局、辺りに人は居ないという事実を確認するだけに終わった。その時、ツナは在るべき物が無くなっている事に気付く。

「…あれ…リングが…」

ボンゴレリングが無くなっていることに気付き、慌てて辺りの地面を見回す。が、大空のボンゴレリングは見当たらなかった。

「どうしよ…あれがないとナッツも出せないし…何より、リボーンに殺されるっ…！でも、獄寺くん達も捜さないとっ…あーもう！どうしたら良いんだよ…！」

どちらを優先して良いのか分からず、ツナは思わずそう叫ぶ。その時、その背後にあるビルから凄まじい音と共に煙が上がった。

「え？…今度は何イ！？」

そちらを見ると、どうやら誰かと誰かが闘っているらしい。その一人が、ツナが立っている近くの地面にたたき付けられた。

「ヒィ〜！！」

思わず後ずさるツナだが、土煙が晴れたそこには、中年の男が倒れており、どうやら気絶している様子だった。

「な…何？何なのここオ！？」

「おいお前！大丈夫か！？」

「…え？」

聞き覚えのある声がし、ツナはそちらに眼を向ける。そちらからは、声の主がツナに駆け寄ってきた。どうやら先程の中年の男と闘っていたもう一人のようだが…ツナは、その人間の顔を知っていた。い

や、知らないわけが無かった。

「しょ……」

「よし、怪我は無いようだな。良かった……しかし、その顔どこかで見た気が……」

「初代…ボンゴレプリーモ!!?」

そこに居たのは、紛れも無いボンゴレファミリー初代ボス、ジヨットだった。

「十代目エー!!」

「ツナー!どこだー!?!」

一方、獄寺と山本は、一人姿の見えないツナを捜し、同じ町を歩いていた。

「…くそっ!十代目…一体どこに…」

「何かここ物騒だし…無事だと良いんだけどな…」

「なっ…てめえ、縁起でもねえこと言うんじゃない!」

『ゴオオオンッ!!』

「…!?!」

獄寺が山本につかみ掛かろうとした時、近くのビルの壁を突き破り、ボロボロになった男が二人の足元に倒れてきた。

「んなっ…」

「?...あのー...なんとここで昼寝したら、風邪ひくつすよ?」

「...ってアホか!気絶してんだよ!!」

「ふー、この辺りは、今の奴で最後だな?」

「うむ。しかし、ジヨット殿はどこに行かれたのか…」

「気にすんな。あいつに限って万が一なんてこたねえ。」
「「？」」

ビルに空いた穴の中から、二つの人影が現れる。そして同時に聞こえてきた聞き覚えのある声に、獄寺と山本は人影の正体を確かめようと眼を懲らす。…二つの人影は、やがてビルの中から出て来た。

「さてと、後始末して終わり……………あ？」

「どうしたでござるか、G殿？……………は？」

「んなつ…初代嵐の守護者…G！？」

「そっちは…初代雨の守護者の……………あり？名前…なんだっけ？」

「っておい！」

獄寺と山本の前に現れたのは、初代嵐の守護者Gと初代雨の守護、朝利雨月。彼等もまた、紛れも無い”本物”だった。

コンクリートの町の一角で、ツナは初代ボンゴレボスのジヨットと、向かい合っていた。居るはずの無い人間の出現に、ツナの頭はさらに混乱する。

「…いかにも、オレがボンゴレのボスだが…それにしてもその顔どこかで…んー…ああそうか、オレに似ているのか。いやしかし、ここまで似ているとはなあ…」

「な…んで…どして…？」

「…おいおい、いくら似ているからって、そんなに凝視してくれるな。何か恥ずかしいだろう。」

「あ、す、すいません…」

言ってツナは、視線をジヨットの顔から手の方に落とす。そこには？グローブと、原型のボンゴレリングがあった。

「……………！！」

（間違いない…本物だ…でも…こんなことって…）

「…この町の住人達は皆避難させたし、町の入り口は全てオレの仲間が見張っているから、外から誰かが来ればすぐに分かる。」

「…え？」

ジヨットが、グローブをはめた右手をツナの顔の前にかざした。

「お前、何者だ？」

「えっ……………それは…」

この時、ツナの中にある超直感が叫んだ。”自分の正体を知られてはならない”と。しかし、だからと言って咄嗟の嘘をつけるほどツナは機転がきかない。黙っている自分に、さらに疑いの眼を向けてくるジヨットに、ツナがさらに焦った時…

「あつ…」

ジヨットの背後にあるビルの屋上に、ジヨットを狙って居るのである。狙撃手の姿を、ツナの眼は捉えた。

「危ないっ！」

「は…うおっ!?!」

次の瞬間、ツナがジヨットに体当たりし、それと同時に今までジヨットの頭があつたそこを弾丸が通過した。

「…!!そこかっ!!」

ツナの体当たりで崩れかけた体勢を立て直すと同時に、ジヨットはビルの屋上に居た狙撃手を死ぬ気の炎を飛ばし、仕留める。それを確認すると、勢い余って地面に倒れたツナへ視線を落とした。

「い…たた…あ！大丈夫ですか!?!」

「…ああ。おかげでな。」

身体を起こし、ジヨットに怪我が無いと分かると、ツナは心からの安堵の息を吐く。その様子に、ジヨットは口元を緩めながら、未だ地面に座っているツナに手を差し延べた。

「え…」

「ありがとっ、助かった。お前が何者か分からんが…敵ではない。そうだろう?」

「…はい!」

ジヨットの言葉に、ツナも笑いながらそう返し、その手を握り、立ち上がった。

「…さてと、一つ聞くが…お前、宿はあるのか?」

「え?…いや…」

こんな始めてくる、しかも何故かジヨットが居るような場所に、宿の当てなどあるわけがない。そう思いながら、ツナが首を横に振ると、ジヨットはなら…と切り出した。

「オレの屋敷に來い。部屋なら有り余っているからな。」

「え…えええ!?!」

いきなりのジヨットの提案に、ツナは驚きの声を上げる。そんなツナを見、ジヨットはくすくすと笑った。

「で、でも悪いし…」

「遠慮するな!もっとお前と話してみたい!それに、何だか他人の気がせんしな。」

「い、いやそれ当たり前だし…」

「ん?」

「あ、いえ!何でも無いです!それじゃ、お言葉に甘えて…」

ツナがそう言うと、ジヨットは無邪気な笑みを浮かべた。

「おおそうか!では決まりだな!えっと…」

「あ、オレ、沢田綱吉って言います。」

「そうか、オレはジヨットだ。よろしくな綱吉！」

ジヨットの無邪気な表情に、継承試験の時のイメージしか持っていなかったツナは少し違和感を覚えたが、よく見ればジヨットの額には炎が灯っていないので、恐らくこちらが素なのだろうと納得した。と同時に、今まで抜け落ちていたものが戻ってくる。

「そうだ！獄寺くんと山本……あ、あの、オレと同年くらいで、銀髪の男の子と黒髪の男の子……見ませんでした！？」

「ん？いや……見ていないが……お前のツレか？」

「友達なんです！そうだよ……二人を捜さなきゃ！」

「お、おい！」

道もろくに分からぬだろうに走り出したツナを見、ジヨットはため息を吐いた。

「……まるで、昔のオレだな……」

そう呟くと、ジヨットはツナの後を追ひ、走り出した。

「……はて？この者達の顔……拙者どこかで見たような気が……」

「いやいや、オレ達に似てるんだろが。おいお前等、この町の奴……じゃねえよな？もう全員、とっくに避難し終えてるはずだ。町の入り口はボンゴレが封鎖しているはずだし……どこから入って来た？」

一方、G、雨月と出会った獄寺と山本。こちらもお会はずの無き者達と出会った事で、かなり混乱しているようだ……

「んなの決まってるっしょ？空からバコーンと……」

「「ってアホか！誰か信じるんだんな話！！…あ？」」

山本の天然発言に、Gと獄寺はぴったり同時に同じセリフでツッコむ。そして…

「何と、空からか。なるほど…それなら包囲網にも引つ掛からないでござるな。」

「「って信じるなこのバカ！！…あ？」」

「ははっ。息ピッタリなのな！」

「仲が良いでござるなあ。」

「「黙つとけやお気楽コンビ！っ！かお前もハモンじゃねえ！！！」」

何度やってもハモる獄寺とG。そんな二人を見ながら、陽気な笑みを浮かべる山本と雨月。その時、獄寺と山本にとって聞き慣れた声が聞こえた。

「獄寺くん！山本！！」

「！ツナ！」

「十代目！！ご無事だったんですね！！」

「んな…ジョット…？」

ビルの間から、四人の傍に出たツナを見つけるなり、二人はそちらへ駆け寄る。ツナの後ろからジョットも来、Gと雨月はそちらへ歩み寄った。

「十代目！どこかお怪我はっ…！？」

「あ、うん大丈夫。ごめんね、心配かけちゃって。」

「気にすんなって。無事だったんだからよ。」

「ありがとう…それより、獄寺くん。」

「？何すか？」

ツナは声を小さくし、自分達の横で話しているジヨット達の方をちらりと見ながら言った。

「あの人達が居る時だけで良いからさ…オレのこと、十代目って呼ぶのはやめてくれないかな？」

「はっ…？それは、何故？」

「よくわかんないんだけど…とにかく、頼むよ獄寺くん。何ならツナって呼んでも良いからさ。」

「なっ…：…わかりました。では、綱吉さんとお呼びさせていただきます。」

「ありがとう、ごめんね、無理言っ…」

「いえ！滅相もございません！…それより、何故そのようなことを…？」

「確かに…。それに、何であの人達が居るんだ？」

山本は、ジヨット達の方を見ながらそう言う。どうやら彼等は、有り難いことにツナ達の話聞いてはいないようだ。

「それは…オレもまだ…ところで二人とも、リングは…どうしたの？」

「ああ、それがどつかで無くしちまってな…」

「申し訳ありません…実は、オレも…」

「そうなんだ…とにかく、オレ達の正体は気付かれないように…」

「おい綱吉！」

「！は、はい！！」

いきなりジヨットに声をかけられ、心臓の音を必死隠しながら、ツナはジヨットの方を向いた。

「友人と再会出来て、沢山話したいのは分かるが、ひとまずオレ達の屋敷に行こう。もちろん、その二人も一緒にだ。」

「あ、そうですね。ほら、二人とも行こう。」

「はい！」

「おう。」

ツナ達はジョット達に連れられ、ボンゴレの屋敷へと向かった。

（ジョット達の会話）

作（ツナ達の会話の横で交わされていたジョット達の会話です。）

「おいジョット、何だあいつ？昔のお前、そっくりじゃねえか……」

「ああ、だがそれを言うなら、あの銀髪と黒髪の少年もまるで昔のお前等ではないか。」

「まあ、確かにそうだが……」

「しかし、奇妙なこともあるものでござるなあ。拙者達と瓜二つな者達がそれぞれ出会い、さらに拙者達とも出会うとは……」

「確かに。だが、今ところ偶然としか言えねえ。ところでジョット、お前あいつらをどうする気なんだ？」

「ん？ああそれなのだがな、聞けば宿の当ても無いそうだし、しばらくオレ達の屋敷で保護しようと思っている。」

「は！？……だが、それは良いかもな……あそこまで似てりゃ、オレ達の血縁者かなんかと間違えられて敵対ファミリーに狙われるかもしれねえし……」

「拙者も、ジョット殿に賛成でござる。もう少し彼の者達と話してみとっござるでな。」

「では、決まりだな。おい綱吉！」

こうして、彼等は出会った。それは本来、遙か先の未来にあるはず

の出会い。早過ぎる出会いがもたらすものは果たして、何なのか…
それはまだ、分からない。

ボンゴレの屋敷に向かう道中。ツナ達は、ジヨット達と親しげに会話をしながら歩いていた。

「えっと…沢田綱吉に獄寺隼人、山本武だっ たっ けか？三人共日本人だよな？」

「あ、はい。でも獄寺くんはイタリア人とのハーフですけど…」

「そうなのか？」

「まあな。」

「それにしても、日本語うまいっすね。えっと…Gさんで良いっすか？」

「ああ、好きなように呼べ。日本語はまあ…日本人が身内に居るかな。嫌でも覚える。」

言いながら、Gは雨月の方を指した。

「拙者もジヨット殿達と過ごす内、イタリア語を覚えてしまっ てなあ。いやはや、環境への順応とやらは恐ろしいでござる。」

「あー、ググツのピシッて感じっすか？」

「そうそう。まあ別の言い方をすれば、ガンツのパシッといった感じでござる。」

「パンツのメキメキ？」

「いや、スパツのグイグイとも…」

「何で会話成立してんのー！？」

山本と雨月の感覚の会話を聞いたツナは、思わずそうツッコんだ。

「…あのガキ…やるな…雨月の感覚会話についていけるとは…」

「感覚会話って何？そんな会話あったっけ！？」

「むづ…悔りがたいな…ああいう順応の早さは、見習うべきか…」

「いやいや、見習わなくて良いですから！！」

Gとジョットの発言にも、ツナは的確にツツコミを入れていく。そんな中、今まで黙っていた獄寺が口を開いた。

「おい、てめえ等の屋敷にはまだ着かねえのか？」

「ん？いや…もうすぐ着くはずだが…」

「おお、あれでござるよ。」

「「「！」「」」」

雨月が指した方には、かなり立派な屋敷が建っていた。今まで歩いてきた町並みとは明らかに違ったその屋敷の雰囲気、ツナ達は思わず息を飲む。

「はは、驚いたか？」

「まあ、あの町の様子からじゃ想像つかなかったろうが、ここが真正銘、この町におけるオレ達の本拠地だ。」

「そついう事でござる。ささ、入った入った。」

雨月に押され、三人は屋敷のバカ広い庭へ足を踏み入れる。その庭はきちんと手入れがされているようだったが、人の気配はここでも感じられなかった。

（そついえば…ここに来てから、この三人以外には敵っぱい人しか見てないよなあ…）

歩きながら、ツナはそう思う。おまけに町はボロボロだったし、獄

寺と山本を捜して走り回っている時、そこかしこから煙が上がっても居た。

（ひょっとして…抗争…とかだったのかな…）

「ああそうだ。先刻に敵が攻め込んできてな。綱吉達と逢ったのは、ちょうど残党狩りが終わった時なんだ。」

「あ、そうなんですか………ん？」

ツナは、ジョットが自分の考えていることを見透かしたように言葉を発した事に、疑問を持った。

「あの…オレ、声出てました？」

「いや？だが、オレは読心術の心得があるのでな。何やら考え込んで居たから、使わせてもらった。ああ安心しろ、考えの深いところまでは読んでいない。」

「は、はあ…」

（何て言うか………やっぱ、常識外れの人だな…）

「いやあ、それほどでも。」

「また読まれたー！てか、褒めてないからー！！」

そんな会話を交わしながら、彼等は庭を通り過ぎ、屋敷の中へと入った。

「うわあ…」

「すっげー…」

屋敷の内装の豪華さに、ツナと山本は思わずそう漏らす。その様子に、ジョットはくすりと笑いながらツナ達を屋敷のリビングへと案内した。そこに置かれた二つのソファーに、ツナ達とジョット達はそれぞれ向かい合う形で座る。

「さてと、紅茶でも飲むか？何なら茶菓子も出すが？」

「あ、いえ…お構いなく…」

「じゃあ、お言葉に甘えて！」

「ちよ、山本！」

「くおら野球馬鹿！綱吉さんを無視して何勝手な事言っやがる！？」

「良いじゃねえか。せつかく出してくれるっつーんだから。」

「そういう事だ。G、すまんが頼む。」

「ああ、わかった。」

ジヨットに言われ、Gは居間の隣にある小さな台所へ続く扉をくぐった。

「…あの…この屋敷って、オレ達の他に人は…？なんか、気配が無いみたいなんですけど…」

「ん？ああ…先日から、いろいろと仕事を立て込んでな。今は皆出払っているのだ。といっても、他にあと…四人はすぐに帰ってくるぞ？他の奴は…一番早いところで、一週間後と言ったところか。」

「いつ…一週間！？」

ジヨットの口から出たその時間の単位に、予想してなかったのかツナは驚きの表情を浮かべる。

「ああそうだ。何故かここから遠い場所で、しかも人員を多量に裂かねばならん仕事ばかりが入ってなあ…」

「まあ、ここに残る事になった拙者やジヨット殿にG殿、それに他の四人も相当の手練でござる故、身の心配はいらぬでござるよ。」

雨月の言葉に、ツナが複雑そうな笑みを返した時、Gが人数分の紅

茶とケーキをお盆に乗せて戻ってきた。

「待たせたな。さあ食べ。」

「あ、じゃあいただきます…」

「うまそーだな。」

「…………ちつ。」

「おーい、何だ今の舌打ちは？」

獄寺に対するGのツッコミはさておき、三人は紅茶を口に運んだ。

「！おいしい！」

「うめえ！」

「こりゃいけるな！」

三人の感想と笑顔に、ジヨット達の顔も自然と綻んだ。

「G、また腕を上げたようだな。好評だぞ。」

「ま、誰かさんの好みが激しいからな。いやがおうでも上手くなるさ。」

美味しそうに紅茶や、こちらも美味なケーキを口に運ぶツナ達の前で、ジヨットとGがそう言った時…

『ガチャッ』

「究極に今帰ったぞー！…む？」

「君、五月蠅いよ。…ん？」

「くんくん…何だか、良い匂いがするんだものね！…あれ？」

「ヌフフ…何ですか？その者達は。」

リビングのドアが開き、そこには初代ファミリーの、残りの守護者

達が立っていた。

リビングに入ってきたのは、初代晴れの守護者、ナックル。初代雲の守護者、アラウデイ。初代雷の守護者、ランポウ。そして初代霧の守護者、D・スピード。リビングのソファーに座っていたツナ達を見、四人は少し固まる。そんな中、ナックルがツナ達に歩み寄って来た。

「…ジョット！G！雨月！究極に何があったのだ！？まるで子供のようだぞー！」

「ってえ…アホかアー！！！」

『ゴンッ』

ツナ達を、どうやらジョット達と間違えたらしいナックルの後頭部に、Gがチョップをお見舞いする。

「よく見る！オレ達はこつちだ！」

「…む？…なんと！ジョットやGや雨月が二人！？これは究極にどういう事なのだ！？」

「だーから違うつつてんだろーが！おい、お前等からも言ってくれー！」

Gに言われ、ア然としていたツナがまず口を開いた。

「あ、あの…オレの名前は沢田綱吉と言いまして…」

「その人達とは、全くの別人なのな！」

「そういう事だ。分かったかこの究極バカ！」

「ぶっ…究極バカって……それ、ナイス！」

獄寺の言葉に、ジヨットは笑いを堪えながら親指を立てそう言う。
そんな中、ナツクルはさらに場を混乱させる発言をした。

「なんと…では…隠し子かア!？」

「何でそうなんだアー!!!？」

ナツクルの発言に、今まで黙っていた他の守護者達も口を開いた。
ちなみにジヨットは、飲んでいた紅茶が変なところに入ったらしく
むせ返り、雨月はその背中を摩っている。

「何だ、君達子供なんて居たの？それならもっと早く言ってよ水臭い。」

「それなら似てるはずだものね!」

「又フフ…これは驚きですね。まさかあなた方が子持ちだったとは…」

アラウデイ、ランポウ、スペードの三人はあっさりと納得してしまい、Gが慌てて弁解する。

「いやいやいやいや!!!!!!違う違う違う違う!!!!!!こいつらはさっき町で偶然逢っただけで…」

Gは必死に弁解しようとするが、ナツクルはそれを耳に入れる様子は無い。

「お前等！究極に苦勞したのだろうが、もう心配はいらんぞ！今からボンゴレで全面的に補助を…」

「ってくおらアア!!!聞きやがれこの単純バカ!!!」

ツナ達に話し掛けるナツクルに、Gはさらにチョップを入れた。その様子を見、ツナと獄寺は苦笑いを、山本はいつもの爽やかな笑顔を浮かべる。

「はは、賑やかなのな！」

「てゆうか…何か…すぐ見慣れた光景の気がする…」

「…オレ…今芝生頭を思い出しましたよ…綱吉さん…」

「うん…オレもだよ…獄寺くん…」

三人がそれぞれ思い思いの事を言っていると、Gが三人に助けを求めてきた。

「おいお前等！ごちゃごちゃ言っでねえで否定してくれ！オレ達の無実を晴らしてくれ！！」

「なあ綱吉！違うよな！？お前はオレの隠し子とかじゃないよな！？」

「そうでござるよな！な！？」

「え？あ、はい。違います違います。」

三人に言われ、ツナは慌てて否定の言葉を言う。その両側で…

「つか…そんな言い方したら本当に違うのに嘘言ってるみてえじやねえか…」

「だな。」

獄寺と山本がそう言っていた。

「まあ、悪ふざけはこのくらいにして…」

「わ、悪ふざけ？」

アラウデイの言葉に、ツナとジョットは苦笑いを浮かべながら同時にそう返す。それを無視し、アラウデイはツナ達に歩み寄った。

「君達、何者だい？そもそもどうしてここに？」

「あ…えつと…」

「アラウデイ、綱吉達とは先程残党狩りが終わった時に町で逢ったんだ。オレ達にここまで容姿も似ている訳だし、外に居ては危険と思ひ連れてきたというわけだ。」

答えあぐねているツナに、ジョットがそう言つて助け舟を出す。ジョットの説明に、アラウデイはそちらを見て言葉を返した。

「ちょっと…大丈夫なの？容姿が似てるっただけで連れて来て。ひよつとしたら敵側の奴かもしれないのに。」

「なっ…てめえ！」

「ご、獄寺くん！落ち着いて！」

「しかし…」

「ツナの言つとおりだぜ獄寺。俺達は何も悪くねーんだからよ。堂々としてれば良いのな！」

「…ちっ！」

ツナと山本に言われ、アラウデイに反論しようとした獄寺は洪々と引き下がる。当のアラウデイは、ジョットの顔をじつと見つめているが、不意にジョットは微笑を浮かべた。

「その心配はいらんさ、アラウデイ。オレが保障する。」

何の迷いも無く、あっさりと自分達を信じると言ってくれたジョットに、少し驚いたような表情をツナ達は浮かべる。いくらツナが自分の命を救おうとしてくれたとは言つても、ジョットの立场上現段

階では初対面である自分達をあつさりと信じてくれるということは十分驚けることだった。そしてジヨットの言葉に、アラウディはため息混じりに言葉を発した。

「…君お得意の、超直感とやらかい？」

「まあな。何か起きたら、責任は全てオレが取るさ。」

ジヨットがそう言うのと、アラウディはそう。とだけ言い、引き下がった。

「…ところで、究極にお前等は雨月と同じ日本人だろう？この町に居たということは観光でも無いだろうし…」

「確かに、あの町に観光客を呼べるようなものは一つも無いだものね。」

「それもそうだね。どうしてなんだい？」

ナツクル達にそう問われ、どうしてここに来たのか自分でもよく分からないツナ達は、自然と口を濁らせる。

「それは…その…何て言ったら良いか…」

「そういえば、イタリア語が分からないような事も言っていたな？イタリアには何をしに来たのだ？」

「えっと……………ん？」

ジヨットの言った言葉が言外に指す意味。それを理解した瞬間、ツナの顔が引き攣った。

「え…えええええ！！？ここって…もしかして…イタリアー！！？」

そう叫んだツナと、ツナの叫びでそれを理解し、驚愕の表情を浮か

べた山本と獄寺に、そんなことも知らなかったのかと言いたげな表情を、ジヨット達は浮かべた。

「イタリアに…初代ファミリー…ツナ、もしかしてここ、過去の世界…とかじゃねえのか？」

「この野球馬鹿！もしかしくなくても、そうとしか考えられねえだろーが！」

「…うん…オレも、そう思う。」

ツナ達が、抗争の起きた町でジョット達と早過ぎる出会いをしたツナ達。その夜、ボンゴレの屋敷の、ツナに宛がわれた部屋に三人は集まっていた。

「でもここが本当に過去だとしたら…どうやって帰れば良いんだろ？そもそも、どうしてこの時代に来ちゃったのかも分からないし…」
「んー…それについては、オレはあの並木道がヒントになってると思うのな。」

「え？並木道って…あ…あの…」

山本の言葉に、ツナは学校帰りに見つけた、見慣れない並木道の事を思い出す。…そう、ツナはあの並木道の事を、そしてそこで逢ったあの奇妙な人物の事を、山本に言われるまで忘れていたのだ。

「野球馬鹿にしちゃ良いとこ突くじゃねえか。綱吉さん、オレもそう思います。あの並木道と、あの妙な野郎…この二つが、未来に戻る手掛かりになるはずです！」

「うん、そうだね！でも…」

「？綱吉さん？」

「どした？ツナ。」

「いやなんか…変な感じだな…って思ってた。ついこの間までは未来に行つて、過去に帰ろうとしたのに、今度は過去に来ちゃつて、それで未来に帰らなくちゃいけないなんて。」

「確かに…そうっすね。」

「まあな…。あ、ところで二人とも、匣は持つてるか？」

「え？あ、うん。ほら…」

「あたりめーだろーが。」

そう言つて二人は、匣をポケットから出し、手に取る。少し遅れて山本も自分のボンゴレ匣を出した。

「…匣があつても…リングが無いんじゃ、開匣は出来ないね。」

「そだな。未来に帰る前に、あのリングも捜さねえと。」

「んなこと、てめえに言われるまでもねえ！…だけど、未来からここに来て、眼を覚ました時には、もうリングは無くなってやがった…」

「うん、オレもだよ…一体、どこで無くしちゃったんだろう…？」

「もしかしたら…」

「え？何？山本。」

「聞くだけきいてやる。言ってみやがれ。」

二人の視線を集め、山本は本来リングが在るべき指を見ながら答えた。

「…ほら、あの並木道で、オレ達…変な空間を通つて、ここに来ちゃったろ？」

「う、うん…」

「その時…もしかしたら、未来の方に忘れて来ちまったんじゃねえかって思つてな。」

「…なるほど、確かにそれなら筋は通るが…」

獄寺が賛同しかけた山本の推理に、ツナが恐る恐る反論した。

「あの…山本、それは違うと思う…」

「へ？」

「綱吉さん！それは何故？」

「うん…オレさ、実はあの空間を通ってる間、ほんの少しだけ…意識があつたんだ。それでその時、オレや二人の指に嵌められてたボンゴレリングが光ってたのを、確かに覚えてる。」

「そうなのか？ツナ。」

山本の言葉に、ツナは確信を持った顔で頷く。すると獄寺が、怪訝そうな表情を浮かべた。

「となると、最初の疑問がまた浮かんできますね？あの空間を通ってきた時は確かにあつたボンゴレリングが、ここに来てからは無くなっている。」

「あの人達が指に嵌めてたのは…多分、この時代のボンゴレリングなのな。」

「うん。だから、オレ達と一緒に来たオレ達のボンゴレリングは、別のどこかに在る。それは間違いないと思うんだけど…」

「そのどこかがどこという…」

「手掛かりは…」

「ゼロなのな。」

山本の言葉に、ツナと獄寺は同時にため息を吐いた。

「…なあツナ。やっぱりあの人達にオレ達の事、話した方が良いんじゃないねえか？」

「野球馬鹿に賛同するのは癪ですが、オレもそう思います。綱吉さ

ん。あいつ等なら、オレ達の言うことを無下にはしないでしようし…いざとなったら、このボンゴレ匣が物証になってくれます。」

「…うん。オレも、ジヨットさん達だったら、ちゃんと事情を話せば分かってくれる…協力してくれると、思う…」

「…だつたら！」

「…でも！」

ツナが発するのは珍しい、必死な声色に、二人は喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「…もう…何となくとしか言いようが無いんだけど…オレ達の事がジヨットさん達に知られたら…何だか、凄く大変な…取り返しのつかない事になる気がするんだ…」

”何となく”、”気がする”など、曖昧な言葉があるにも関わらず、ツナの言う言葉には不思議と山本と獄寺も反論出来なくなった。まだ踏んだ場数こそ少ないものの、まがりなりにも戦場に立った経験から来る彼等のカンが、ツナの言うことには従うべきだと、そう訴えていた。

「…わかりました。綱吉さんがそこまで言うなら、オレも何も言いません。」

「オレもなのな。ツナが言いたくなったら、その時にツナの口から言えばいいのな！」

二人の返答に、ツナは心底嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ありがとう、二人とも。」

「いえ！ありがとうだなんてとんでもありません！」

「そうだぜ。気にすんなって。」

「うん…とにかく…今日はもう寝よう?」

「そうですね!」

「それじゃツナ、おやすみ!」

「良い夢を! 綱吉さん!」

「あ…ははは…うん、おやすみ。」

ツナと就寝の挨拶をし、それぞれ自分に宛がわれた部屋へ戻ろうと、ツナの部屋の扉を開ける獄寺。その瞬間…

「…?」

「獄寺? どした?」

「…獄寺くん?」

扉を開けた瞬間、獄寺の動きが静止し、その後ろにいた山本も、ベッドに入ろうとしていたツナも、獄寺に視線を向ける。当の獄寺は、自分が扉を開けた瞬間に感じた違和感の正体を思案しているが、すぐにはつとした。

「あ…な、何でもねえよ! 綱吉さん! それではまた明日!」

「? そうか? じゃツナ、また明日な!」

「うん!」

ツナの笑顔を背に、二人はその部屋を出、山本は自分に宛がわれたツナの部屋の右隣りへ、獄寺はその逆の左隣りの部屋へと戻って行った。

「…何だっ たんだ… さっき…」

部屋に戻った獄寺は、先程ツナの部屋の扉を開けた瞬間感じた違和感の正体を考えていた。

「…何だったんだ…さっきの…」

獄寺が感じた違和感。それは、扉を開けた瞬間、自分の横を何者か
が通り抜けたような感覚。だが、それは本当に微々たるもので、現
にツナも、自分のすぐ後ろに居た山本すら気付かなかった。それを
理由に、獄寺はその違和感を忘れ去るようにして眠りについた。

「又フフ…危ない危ない…幾ら近くを通ったからと言って、まさか
幻術を使っけていて感づかれるとは。やはり…ただの子供ではありま
せんね…」

だがしかし、獄寺の感じた違和感は、確かに現実のものであった。
その正体は、幻術でその身を隠し、ツナ達の会話をずっと聞いてい
たスペードだったのだ。

「…しかし、随分と面白い話が聞きましたね…まず、彼等は未来か
ら来た可能性がある。そしてあの…匣と呼ばれた、ボンゴレの紋章
が入った小さな箱…そして、ボンゴレリング…」

ツナ達が、ああも自分の見知った者達に酷似した容姿をしているの
も、未来から来たのであれば彼等の子孫という考え方も出来る。そ
うなれば、自然と他の疑問は解けていく。あのボンゴレの紋章が入
った箱は、恐らく未来のボンゴレから彼等に与えられたアイテム。
そしてボンゴレリングは、彼等が未来のボンゴレの後継者とその守
護者と考えれば良い。そこまで思案を巡らせると、スペードは不適
な笑みを浮かべた。

「又フフ…ただ会話を盗み聞きただけで、こうもあっさりと筋道
の通る推理が出来るとは…やはりまだ子供。周りに誰も居ないとな

れば自分達に不都合な事をべらべらと喋ってくれる…」

といっても、幾ら筋道が通ると言っても、その推理はツナ達が未来から来たという、常識では有り得ない事を前提としたもの。だがしかし、逆に言えばそう解釈する以外に、筋道の通る推理は少なくとも今の段階では出来ない。そこまで考えてスピードは、ツナ達の会話の中に出て来た言葉の中で、唯一意味の分からなかった単語について考え始めた。

「…並木道…恐らく、それが今回の一件で全ての鍵を握るキーワード。…又フフ…少し、調べてみますか…」

そう言うと、スピードの周囲には霧が立ち込め、それが晴れた時、そこにスピードの姿は…既に無かった。

「おはよう綱吉。夕べは眠れたか？」

「あ、おはようございます。ジヨットさん。はいおかげさまで…」
「そうか、それは良かった。」

ツナ達が過去の、初代達の時代に来てから、初めての夜が明けた。ベッドから起き上がり、髪を軽く手櫛で解いていたツナの部屋に、ジヨットが入って来る。

「綱吉、Gと雨月が食堂で朝食の用意をしているぞ。お前の友人二人は既にそこだ。早く来い。」

「あ、はい！って…あの…食堂って…どこですか？」

「ん？ああすまんすまん。そつえば、ここと居間と玄関しか綱吉は知らなかったな。来い。案内する。」

そう言つて歩き出すジヨットに、ツナは慌ててついて行つた。

「すみません…」

「何を謝る？きちんと屋敷の中を案内しなかったのはこちらなのだから、こちらこそが謝るべきだと思うが？」

「あ、いや…あの、ジヨットさん。」

「ん？何だ？」

「…聞かないんですか？オレ達が…どこから来たとか…」

そう、ジヨットはツナ達と逢つてからただの一度も、どこから来たのか等という問いを投げ掛けては来なかった。それはツナにしてみれば有り難いことなのだが、やはり問わずにはいられなかったのだ。

ろつ。問い掛けられた当のジヨットは、キョトンという擬音が聞こえそうな表情を浮かべていた。

「どこつて……ジャッポーネだろう？」

「え？ いや…確かにそうなんですけど…」

「なら、それで良いではないか。どうしてそれ以上詮索する意味がある？ 綱吉が話したいなら話せば良いし、話したくないなら話さなくても別に良い。」

「…そう…ですか…」

ジヨットの言葉に、ツナは胸に巣くっていた得体の知れないもやもやが、少し消えたような気がした。

（ああ…やっぱりこの人も大空なんだな…）

心の中で、ツナはそう呟く。ジヨットは読心術を使わなかったのか、何も言うことは無く、二人はそのまま食堂に着いた。その食堂には、人数分の食事が並べられた長テーブルがあり、入り口から見て向こう側に初代守護者達、手前の方に獄寺と山本が居た。

「あ、綱吉さん！ おはようございます！」

「おはよーなのな、ツナ！」

「あ、獄寺くん、山本、おはよう。」

言いながらツナは、二人の間の空いていた席に座り、ジヨットは上座へ座った。

「ほう、今日も上手そうだな。」

「そうでござろう？ 拙者とG殿が腕によりをかけて作ったでござるからな。」

朝食を見てのジョットの感想に、雨月は誇らしそうにそう言う。その横に座っていたGは、ため息混じりに言った。

「たつく…使用人まで駆り出さなきゃならんとは…また人員補給しねえとな。」

「同感だね。といつても、今回みたいに人手が多量に必要な仕事がここまで重なるなんて事、早々あるもんじゃないだろうけど。」

Gの言葉に続き、アラウデイもそう言う。ここで山本が、抱いて当然の疑問を口にした。

「…あのー…いくら人手が要るって言っても、料理人とかまで駆り出すもんなんすか？」

「だろう！？究極にそう思うだろう！？」

「へ？」

自分の疑問に、ナツクルが賛同してくると思わなかったのか、山本はアラウデイとGに挟まれた位置に座るナツクルに眼を向けた。

「しかし、ここから少し離れた町で急にコックの人手が足りんと究極に大騒ぎが起きてな…」

「何でも、お偉いさんの滞在予定を明日に控えてたらしいからね。そこで急遽、うちのコックを貸したってわけ。ここのコック達の腕は確かだからね。」

「他にも、いろいろなところから人員が欲しい人手が足りないっていう声が出て来てな、何せ、うちのボスはお人よしなもんだから。その全てに必要な人員裂いたら、残ったのはボスのジョットと、幹部のオレ達合わせて七人だけになっちまったってわけだ。ま、もぬけの殻にならなかったただけマシだけだな。」

「へえ…あれ？七人？……あの…一人居ないみたいですけど…」

ツナが、自分達の前に居る初代ファミリーが六人しか居ないということに気付き、それを言う。それにはジヨットが答えた。

「ああ、スピードだろう？あいつ、夕べから連絡がつかなくてな。まあ、元からまともに連絡が取れる奴ではなかったが。」

「スピード殿に限ってはいつものことでござる故、気にする必要は無いでござるよ。」

「あ、そうなんですか…」

この時、ツナの超直感、スピードに対し何らかの警報を発していた。彼をこのままにしてはならない、と。だがしかし、居場所も分からない相手を、おおっぴらに動けも出来ないツナがどうできようか。今度ばかりはツナも、超直感を無視せざるを得なくなった。

「ぶっはー…あー、うまかったー。」

会話を交わしている内に、いつの間にか皆朝食を食べ終えたらしい。その後ナツクルとアラウディは町の様子を見に行き、雨月とGは部下が居ない事で溜まってしまいがちな雑務整理。そしてジヨットとランポウが、居間でツナ達の相手をする事になった。

「…それにしても、本当にこの二人、似てるんだものね！」

「ああ全くだ。しかし…オレはどうも綱吉が他人の気がしないんだが…」

「え…」

ジヨットの言う事は、当然と言えば当然である。ジヨットとツナは、正真正銘の血縁関係なのだから。

「そんなの当たり前なんだものね。隠し子なんだから。」

「だからそれは違うと言っているだろうが！」

「は…はは…」

未だにジョットの隠し子疑惑を解いていないランポウに、ツナは苦笑いを浮かべる。その横で、山本と獄寺はというと…

「よし…これが最後だ…」

「望むところだ…！」

何やら真剣な雰囲気に向かい合っている。そして同時に手を出した。

「「最初はグー！ジャンケンホイ！！」」

結果、山本パー。獄寺グー。山本の勝ち。

「やつりー！三戦三勝！」

「ちつくしょー！何で勝てねえんだアー！？」

「…楽しそうだな、向こうも。」

「…ですね。」

（な…何で…ジャンケン？）

心の中でツナはそうツツコむ。山本がいつもの爽やかな笑顔を浮かべ、獄寺が膝について（何でジャンケンで負けただけで！？byツナ）居る獄寺。その様子をソファーから見守るジョット、ランポウ、そしてツナ。この時ジョットが、ツナのズボンのポケットから、何かがはみ出ているのに気付いた。

「…ん？…綱吉、ポケットから何か出ているぞ？」

「え？あつ…」

ポケットから出ていたのは、ボンゴレ匣。ツナは慌ててそれをポケットの中へと押し戻した。

「…？そんなに大切な物なのか？」

「あ、はい。まあ…」

「……………」

そんなに大事なら、ポケットではなくもつと落ちにくそうな場所に入れば良いのに。ジョットはそう思ったが、口には出さなかった。

（しかし…）

ツナのポケットからはみ出していたボンゴレ匣。その側面に描かれていたのは紛れも無い、ボンゴレの紋章なのだが、幸いと言っべきか、その大部分はポケットの中で、ジョットはそれがボンゴレの紋章だとは気付けなかった。

（…そういえば…リングが、タベからやけに騒がしいな…まるで…）

綱吉達を、早く追い返せとでも言っているようだ。取っ組み合いを始めようとすると二人を止めるツナと、それを傍観しているランポウを余所に、ジョットは一人、そう思議していた。

「ジョット、ちょっと良いかい？」

「ん？何だアラウデイ？珍しいな。お前がオレに話とは。」

「まあね。」

ツナ達がジョット達の世話になって、四日目の夜。ツナ達が部屋にて寝入った頃、自室でくつろいでいたジョットをアラウデイが訪れた。

「四日前に君が保護したあの子供達なんだけどね……」

「ああ……綱吉達の事か？」

「そう。沢田綱吉、山本武、獄寺隼人。……何となく気になったからね、日本の戸籍を調べてみたんだ。……そしたら……」

「何だ？」

「……居なかった。」

「……は？」

「居ないんだ、彼等のような人間は。」

「なん……だと……？」

アラウデイの言葉に、ジョットは眼を見開きながら、その顔を凝視する。アラウデイもまた、信じられないといった顔で口を動かした。

「……日本だけじゃない。世界中の表・裏の世界全てを洗ってみたけど、彼等の情報は一つたりとも存在しなかった。情報の隠蔽とか隠滅とか、そんな次元じゃない。一から何も存在していないんだ。」

「……どういう……事なんだ……？」

「さあね。とりあえず、スピードは仕方ないとして……他の四人を急

遽集めてよ。勿論、彼等には内緒でね。」

「……………ああ、わかった。」

そういったジヨットの顔は、最初にツナにグローブを向けた、ボンゴレボスの顔だった。

「何だと!？」

「それは…些か妙でござるな…」

「絶対に、おかしいだものね!」

「究極にどういう事なのだ!？」

ジヨットからの呼び出しで、その自室に、G、雨月、ランポウ、ナツクルも集まり、アラウディからの報告を聞く。その顔に浮かぶのは、皆一様に驚愕と、ツナ達への疑念だった。

「…分からん…だが、これは流石に怪しまざるをえんな…」

ジヨットの中の超直感は、未だにツナ達が敵ではないと言い続けて居るが、今回のアラウディの報告は確実に、ジヨットの中にツナ達への疑念を抱かせていた。

「…とにかく、明日にでも彼等を尋問することを提案するよ。本人達は自分達の事について、名前以外は何も言っていない。調査しても何も出て来ない。だけど彼等の容姿は、他でもないボンゴレのボスとその腹心二人に瓜二つ。…これじゃ、怪しむ要素しか無いね。」

「…むっ…」

アラウディの言った事は、紛れも無い正論。ツナ達が、名前以外に自分達に教えた情報は無いに等しいのだから。そう思うものの、やはりジヨットの超直感にはツナ達を危険人物とは見ない。

「…そうだ…あの箱…」

その時、ジョットの頭にツナが大事そうにしていた小さな箱…匣の事が浮かんだ。ジョットはちらりとそれを見ただけが、超直感が、あの箱は彼等の正体に関するヒントだと訴える。

「…確か、綱吉の持ち物に小さな箱があったはずだ…」

「ん？…ああ、小さな箱だったら…隼人も持ってたぜ？赤い箱。」
「そういえば武殿も…こちらは、青い箱でござったが…」

四日間の生活の中で、彼等がかいま見たボンゴレ匣。それを聞くと、アラウデイは神妙な顔をした。

「…三人共が同じような箱を持っていた…これは調べてみる価値がありそうだね。彼等はもう寝てるんだろう？ちよつと貸してもらおうよ。」

このアラウデイの提案に、真っ先に意を唱えたのはナックルだった。

「おいアラウデイ！それは究極にけしからんぞ！人の物を無断で持ち出すとは…」

「だからと言って、普通に言っただけで彼等はその箱を僕等に調べさせてくれるのかい？それが自分達の正体に繋がる鍵だとするなら、尚更貸してはくれないだろうし。」

「…むっ…」

そう言われ、ナックルは渋々と引き下がる。と同時に、ジョット、G、雨月が座っていたソファから立ち上がった。

「…では、綱吉の箱はオレが取ってくる。」

「じゃあ隼人のはオレが。」

「…では、武の箱は拙者が借りてこよう。」

そう言つて三人はそれぞれ、ツナ、獄寺、山本に宛がった部屋へと向かった。

「すう…すう…」

「…これか。」

ツナの部屋。ジヨットの捜す匣は、ツナの枕元に置いてあり、ジヨットはそれを気配を殺しながらそつと持ち上げた。

「…すまん、少し…借りるぞ？」

「…う…ん…」

ジヨットの言葉に反応するように、ツナは声を漏らすが眼を開ける気配は無く、ジヨットはそのまま、音も無くその部屋を出た。部屋を出た廊下で、同じく匣を取ってきたG、雨月と合流し、三人はジヨットの部屋へと戻った。

「…これが、その箱かい？」

「ああ。」

「…この側面に描いてあるのは…究極に、ボンゴレの紋章ではないか？」

「ああ、確かに…」

そして、三つのボンゴレ匣を二つのソファで挟んだ机の上に置き、それぞれソファに座りそれを凝視するジヨット達。やがてジヨットがその内の一つ、ツナのボンゴレ匣を手を取った。

「何故…ボンゴレの紋章が入った物を綱吉が…？」

『カタ…』

「…ん？」

匣の異変を感じ、ジヨットは開匣口からその中を覗く。その瞬間…

『ガタタタタ！！』

「うおっ！？」

ツナの匣が突然に震えだし、ジヨットは思わずその手を離す。匣はそのまま机に落ち、それでも尚動き続けた。

『ガタタタ…』

「なっ…」

「究極に…箱が勝手に動いているぞ！？」

「どういう事だ！？」

「この箱…一体…？」

『ガタ…タ…』

「…あ、止まった…」

しばらくすると匣は大人しくなり、動かなくなる。だが未だにジヨット達は、いきなり動き出したツナのボンゴレ匣を凝視していた。

「箱が勝手に動くなど…究極に有り得ん！」

「だがしかし、この眼で見てしまったでござるからなあ…」

「…こいつも…動いたりすんのか？」

言いながら、Gは獄寺のボンゴレ匣を手取る。だがそれは沈黙したまま、動く気配は無かった。

「…動かねえな…」

「ひよつとしたら、動くものとそうでないものがあるのかもね。あの雨月に似た子の箱は？」

「む？…こちらも、動きそうにないでござる。」

山本のボンゴレ匣を手に取りながら、雨月はそう言う。その時、ランプウがある事に気付いた。

「…あれ？その箱の色…Gや雨月…それにジョットの炎の色と同じなんじゃ…」

「「「え？」「」「」

ランプウに言われ、ジョット達は指に嵌めた自分のボンゴレリングに炎を燈した。

「…確かに…同じだな…」

「…それに、この穴…ちょうどリングが入るくらいじゃねえか？」

「言われてみれば…そうでござるな。」

「…ひよつとして…ここに炎入るんじゃねえか？」

Gの言葉に、雨月は頷き、ジョットは恐る恐るもう一度ツナの匣を手取る。今度は、匣は沈黙したままだった。

「…よし、俺がやってみよう。」

ジョットがそう言い、Gと雨月は同時に頷く。ゴクリと、誰かが唾を飲み込む音と共に、ジョットはリングに燈した炎を匣の穴に入れた。…次の、瞬間、

『ブオオッ!!』

「「「「「!!!!?」」」」」

ツナの匣から、オレンジの炎を纏った”それ”が飛び出した。

ここで時はほんの少し遡り、ジヨットがツナの匣を持ち出した直後…

「…ん…ん？」

ツナが眼を覚まし、枕元の異変に気付くと同時に跳ね起きた。

「無い…匣が…何で…寝た時は確かに在ったのに…！！」

物が物だけに、焦りを隠せないツナは、ベッドの周辺に落ちていない事を確認すると、急いで部屋を出た。と同時に、同じく部屋を出て来た獄寺、山本と鉢合わせる。

「！ツナ！」

「綱吉さん！」

「二人とも！匣が…」

二人はツナに駆け寄り、その言葉で、ツナの身にも自分達と同じ事が起きていると悟った。

「ツナの匣も無くなってたのか！？」

「え…それじゃあ…山本のも！？」

「オレの匣も無くなってました！」

全員のボンゴレ匣が無くなっている事を知り、ツナの顔に浮かんだ焦りが色濃くなる。

「どうしよう…リングだけじゃなく、匣まで…」

「…でも、匣は寝る前は確かにあつたぜ？」
「ああ、ちゃんと確認したよな…」

ツナ達は、自分達が未来から来たという証である匣を、毎晩寝る前に互いに確認し合っていた。そしてその時は在り、今は無い。獄寺が、一番可能性の高い理由を口にした。

「まさか…奴らが!？」

”奴ら”とは、他でもない初代ファミリーの事。それを悟ったツナは、思わず反論の言葉を言っていた。

「そんな！ジヨットさん達が…」

「ですが、この状況ではそうとしか考えられません！」

「…ひょっとして、オレ達がいつまでも自分の正体を話さねえから、痺れを切らしちまったんじゃない？」

「あ……………」

山本の言った事に、ツナは今度は反論出来ずに黙り込む。ジヨット達に正体を話さないようにと言ったのは、他でもないツナ自身なのだから。

「…山本の言うとおりだとしたら、オレ達に奴らを責めることはできねえな…」

「うん……………」

(何だろう…何か…嫌な予感がする…)

このままだったら…全てが今まで通りにはいかなくなるような…ツナがそう思った直後…

『ガシヤアアン！！！！』
「「「「！！？」」」」

ジヨットの部屋の方から、ガラスの割れるような音が聞こえ、三人は反射的にそちらを向く。

「今の音…」

「初代ボンゴレの、部屋の方からっすよね？俺、ちょっと様子を…」
「…外だ。」

「は？」

「ツナ？」

ぼそりと呟いたかと思うと、ツナは踵を返し部屋の中へと飛び込む。そのまま、窓際まで走り寄った時、その眼は見開かれた。

「やっぱり…！」

「綱吉さん！一体何を……！！あれは！！！」

「あの時の…！！！」

ツナを追って、同じく窓際まで走り寄って来た獄寺と山本の眼も、同様に見開かれる。三人の視線が交わる場所では、ツナが最初にボンゴレ匣を開匣した時に飛び出してきた、あの不完全な姿のナッツが、何者かと戦っていた。

「……！！おいツナ！！あいつと戦ってるのって…」

「…ジヨットさん！？」

「G達も居ます！！！」

そして、その不完全な姿のナッツと戦っている初代ファミリーの姿も、同時に彼等の視界に飛び込んで来る。その瞬間、ツナがとった

行動は、咄嗟としか言えないものだった。

「この…!!」

一方、屋敷の外で、ツナ達が見ている事に気づいていないジヨット達は、急に現れた”怪物”を前に、意外な苦戦を強いられていた。

「究極、何なのだこいつは!! 何故こんなに巨大なものがあんな小さな箱に入っておったのだ!？」

「今そんな事はどうでも良いだろうが!とにかく、こいつを何とかしねえことには…!!」

ツナの匣に、ジヨットが炎を注いだ瞬間に現れたのは、今彼等が前にしている”怪物”。それは、部屋の中を幾らか破壊した後窓を突き破って外に出(ツナ達が聞いたのはこの際の音)ジヨット達はそれを追い、その場に足止め、今に至るという訳である。

「どうなっている…こいつが纏っているのは、紛れもない…死ぬ気の炎だ! 一体、どうして…」

(…いや、そもそもどうしてこんなものを、綱吉は持っていた…?)

「ジヨット! 何ぼーっとしてやがる!？」

「!」

Gの言葉に、ジヨットは思考を一旦止め、前を見る。…その視界に飛び込んできたのは、目の前まで迫って来ていた”怪物”だった。

「ちっ…」

避ける時間は無いと判断したジヨットは、両手のグローブに炎を灯し、”怪物”を迎え撃とうとする。だが…

(…いや……これは……)

「ジョット!？」

「ジョット殿!？」

(…無理だ…!!)

”自分では、この攻撃を受け止める事は出来ない”直感的にそう思ったジョットは、無意識のうちに両手に灯した炎を消す。彼の守護者達がその名を呼ぶ中、”怪物”が、ジョットの身体に衝突した…いや、するはずだった。

「…つな…よし…？」

ジョットと同じように、額と両手に炎を灯したツナが、双方の間に割り込まなければ。

9（後書き）

どうやらツナは、ボンゴレリングは無くしたものの死ぬ気丸と手袋は無くしていなかったようです。（↑後付け

「…つな…よし…？」

ジヨットは、自分と”怪物”の間に突然割り込んできた者を見、思わずそう呟く。だが、その表情は驚愕に満ちていた。…当然だろう、自分と似通った容姿をした人間が、自分の見知った炎と武器を使い、目の前に現れたのだから。そして驚愕しているのは、ジヨットの守護者達も同じ。

「ナッツ…戻れ…」

「グルル…」

「ナッツ、戻るんだ…！」

”怪物”…否、ナッツを鎮めることに集中しているツナは、自分に向けられる驚愕の視線など気にしてはいない。だが当のナッツは、自分の主人であるツナが目の前に現れて尚、瞳の凶暴な色を消しはしなかった。

「グルル…ガアアア…！！！」

「…！！」

ナッツは一際大きな咆哮を上げると、ジヨットではなくツナに標的を変え、襲い掛かる。その攻撃を紙一重でかわしながら、ツナはある感覚を覚えた。

「…ナッツ？」

それは、まるでナッツが、何かにおびえているような、その何かから身を守る為に暴れているような、そんな感覚。…そして、同時に思い出す。ナッツの感情には、自分の深層心理が反映されるという事を。

（俺が何かにおびえてる…？…一体、何に…？）

「ガアアア！！」

「！！！」

思考の渦にはまりかけたツナは、ナッツの咆哮で我に返る。気づいた時には、ナッツは既に目の前にまで迫って来ていた。避ける暇はないと判断したツナは、防御の構えを取るが…

「綱吉！」

横から、ジョットの蹴りがナッツに入り、その攻撃はツナに届く前に防がれた。

「グルル…」

「ナッツ、やめろ！」

未だに瞳の凶暴な色を消さず、ツナ達を睨むナッツ。その様子を見、ツナは…決めた。

「ナッツ……すまない。」

「…綱吉？」

呟くように、ナッツへの謝罪の言葉を口にすると同時に、ツナは”あの技”の構えを取り、その手に灯された炎が不規則に瞬き始める。

「……！」

（あの構え……それにあの炎の瞬き……まさか！）

「零地点突破、初代エディション。」

ツナがその技の名を口にすると同時に、ナッツの纏う死ぬ気の炎が凍りついていく。……それを見たジョットの途中で、先程から抱いていたツナに対する疑念が、どんどん膨らんでいった。

「……ふう……」

ナッツの身体が完全に凍ったのを見届けると、ツナは額と両手に灯した炎を消し、安堵の息を吐く。……だがしかし、安堵するのは、まだ早かっただろう。

「……綱吉。」

「え？……は、はい。」

ジョットと、彼の守護者たちが、ツナの周りを取り囲み、皆一様に疑心に満ちた視線を、ツナに向けていたのだから。

「……お前は今、死ぬ気の炎を使っていた。それも、俺と同じ武器を使つて、だ。」

「…………」

「……あの怪物が入ってた箱にあった紋章……それは、ボンゴレのものだよな？」

「…………」

「……そして、今の技は、他でもない、ジョット殿が編み出した門外不出の奥義のはず。……何故、そなたはそれを使う事が出来たのであるか？」

「……それ、は……」

ジョット、G、兩月から順に投げかけられる問いと重苦しい空氣に、ツナはどんどん項垂れていく。

(…どうしよう……もう、隠すのは…)

「…何故、黙っているんだ？」

「……………」

自分達の問いに、何も答えないツナに、ジョットは尚も問う。だがそれでも口を開かぬツナに、ジョットは思わず声を上げた。

「綱吉、お前は最初に逢った時、俺を護ろうとしてくれた！助けようとしてくれた！俺はお前を信じている！！そのお前を、これ以上疑いたくはないんだ！だから、頼む！！…本当のことを、話してくれ……………」

「…ジョット、さん…」

無理だ。これ以上は……もう。そう悟ったツナは、なおも警報を鳴らす超直感にあえて背を向けることを、…自分の正体を、彼等に打ち明けることを決めた。

「おれ、は…」

だが、その先のツナの言葉は遮られた。

「十代目！ご無事ですか！？」

「ツナ！早く逃げるのな！！」

「え？二人とも？」

獄寺と山本の切羽詰った声に。それに続いて、その場に重く響く声

がもう一つ。

「…見つけたぞ、並木道の侵入者よ。」

その無機質な声がした方…屋敷の屋根の上に視線を向けると、…ツナ達が迷い込んだ、あの並木道に佇んでいたフードを目深にかぶった者が月を背に、彼等を見下ろしていた。

10（後書き）

…初代守護者の影、薄くてすみません…
m
|
m

「あいつは…!!」

月を背に、自分達を見下ろすその存在を視界に捉えると同時に、ツナの中の超直感が叫ぶ。”逃げろ”と。

「何だ…？リングが…」

そして同時に、淡い光を放つジヨット達のボンゴレリング。その光が訴える意味を、彼等は直感で感じ取った。

「…にげる…逃げろだと？」

呟くように、ジヨットがそう言った瞬間…屋根の上に立つ存在が、あの並木道の時のように、鎌を大きく振りかざし、そして…振り下ろした。

「……っ!!!!」

「!?!ナッツ!?!」

と同時に、その場に鳴り響く声にならぬ叫び。その音源の方を見る…そこでは、先程ツナによって氷に閉じ込められたナッツが、氷ごとその身体を砕かれていた。

「!!ナッツ!?!」

それを見たツナは、思わずそちらへ駆け寄る。だがそれより早く、ナッツは炎の塊となり、窓の割れたジヨットの部屋の中へと入って行った。

「…あの箱に、戻ったのか…？」

Gがそう呟くと同時に、屋根の上の存在がそこより姿を消す。

「！…究極に消えたぞ！」

「…いや違う……綱吉！！！」

「え？」

超直感の訴えるまま、ジヨットは自分達から少し離れた位置に移動したツナの方に行こうとする。…だがそれより早く、先程まで屋根の上に居た存在が、ツナの背後に現れた。

「十代目エー！！！」

「ツナア！！！！」

獄寺と山本もまた、必死にツナに向かい手を伸ばすが、距離がある為その手は届かない。…ジヨットの手も、同様だった。

「まずは貴様だ…並木道の侵入者よ。」

「え、あ…」

ツナが反応する間もなく、その身体に向かって鎌が振り下ろされた。

12（前書き）

前回再登場した”屋根の上の存在”を、今回から”黒の存在”と表記します。あしからず。

降り下ろされた鎌は、その場に居た誰の反応も間に合わず、ツナの身体を…通り抜けた。

「っ…ツナア…！」

「十代目エ…！」

「綱吉…！？」

瞬間、その名を呼びながら、皆はツナに駆け寄ろうとする。だが、黒の存在がそれを許しはしなかった。

「てめ…退きやがれ…！」

「ツナ！聞こえるか？ツナ…！」

黒の存在に前を阻まれながら、山本は必死にツナへ呼び掛ける。だが、地面に倒れたツナは虚空を見つめたまま、指先の一つも動かない。

「綱吉！おい！しっかりしろ！綱吉…！」

黒の存在に阻まれなかったジョットは、迷うことなくツナへと駆け寄り、倒れたその身体を抱き起こし、肩を揺さぶる。…だがそれでも、ツナは何の反応も見せなかった。

「…執行は終わった。」

黒の存在が、その場の空気とは全くそぐわぬ、冷淡な声で言葉を紡ぐ。

「…後は時が満ちるのを待つのみ。」

「ため、何言つてやがる!？」

「…並木道の侵入者達よ。つかの間の猶予を楽しむが良い。」

黒の存在がその言葉を言うと同時に、雨月の長刀がその身を切り裂く。だが、その身体は濃霧のようにばやけ、やがてその姿を完全に消した。

「消え、た…？」

「十代目!!」

「ツナ!!」

黒の存在が突然消え、誰もが今の状況を理解できずに居る中、獄寺と山本はツナに駆け寄る。と同時に、ジヨットはハッと、言った。

「ナツクル!頼む、綱吉を…!」

「あ、ああ!」

「ちよつと待ちなよ。」

ジヨットに言われ、晴れの炎でツナを助けようとしたナツクルを、何故かアラウディは止めた。

「究極に何をするアラウディ!?早くせねば…」

「少し落ち着きな。よく見なよ。…その子の身体から、一滴でも血が出ているかい？」

アラウディの言葉で、今まで次から次に起こる出来事に混乱していたジヨット達の頭は、少し冷静さを取り戻す。…そして、同時に気づいた。ツナの身体に、血どころか傷の一つすら無いことに。

「綱吉…？綱吉…！」

その名を呼びながら、ジヨットは必死にその肩を揺さぶる。…すると、

「…ん…」

僅かにツナが呻き、その虚ろだった瞳に光が戻った。

「…ジヨット…さん…？」

ツナが呼んだ自分の名を聞き取ると、ジヨットの肩から一気に力が抜ける。と同時に、場の空気がどこか穏やかになった。

「十代目！どこかお怪我は！？」

「ツナ、本当に大丈夫か？」

「う、うん…大丈夫…」

獄寺と山本の言葉に、ツナは曖昧な表情を浮かべながらもそう言い、頷く。

「…ところで、一つ聞いていいか？」

「ああ？何だよ？」

「…さっきからお前が言ってる、”十代目”って…何だ？」
「……………は？」

Gに言われ、獄寺は先程までの自分のセリフを思い出す。…すると確かに、黒の存在を追ってこの場に來た瞬間から、緊急時故の焦りからか、ツナのことを”綱吉さん”ではなく、”十代目”と呼んで

いた。

「……………あ。」

今更ながらに、それに気付いた獄寺はしまった、と言いたげな顔をする。だがそんな獄寺を励ますように、ツナはその肩に手を置いた。

「…もう良いよ、獄寺くん。…話すことに、したから。」

「！…十代目？」

「ツナ？」

一呼吸を置き、ツナはジヨット達初代ファミリーを見やる。…全く、迷いの無い瞳で。

「…話して、くれるのか？お前達の…正体を。」

ジヨットの言葉に、ツナはこくりと頷いた。

「…少し…というか、かなり信じられない話だとは思っんですけど…」

「信じるかどうかは聞いてから決める。…話してくれ。綱吉。」

…その言葉に、ツナは息を小さく吸い込むと、

「…実は、オレ達は…」

ゆっくりと、自分達の正体を、ここに来た経緯を、語り始めた。

黒の存在の鎌が、自分の身体を通り抜けた時、ツナはある光景を見ていた。

（…これって……あの、並木道……？）

それは、ツナ達が学校の帰りに迷い込んだ、あの並木道の光景。そして、あの時とは違い全体的に広がっているもやの中に、自分以外の誰かが立っていることに、ツナは気づいた。

「あの……誰……ですか？」

ツナが話し掛けるも、その人影は何も答えない。聞こえなかったのかと、ツナは思い、もう一度話し掛けた。

「あの！誰ですか！？」

「……………」

「何でこんなところに居るんですか？…山本や獄寺くん…ジヨットさん達がどこにいるか、知りませんか！？」

「……………」

ツナの問いに、人影は尚も無言を通す。その事に、ツナがいい加減、不安を感じ始めた時……人影の手の辺りで、何かが光を反射し、キラリと光った。

「……………」

その、光を反射した何かを見ようと、ツナは眼を凝らす。…すると、そこに見慣れた物があることに気づいた。

「…ボンゴレリング!？」

それは、ツナ達がどこかで無くした、大空、嵐、雨のボンゴレリングだった。

「あ、あの…それ、どこで…!？」

「……………」

「す、すいません…返して、貰えませんか?大事な物なんです!」

ツナがそう言うも、人影はやはり沈黙を守り通す。だが、それでもリングは返して貰わなければ…と、ツナは人影の方へ歩み出した。

「そのリング、オレと…オレの友達の、大切な物なんです!だから……………え?」

歩み寄ったことにより、今までもやに隠れて見えなかった人影の容姿が明瞭に分かった。…だが、それと同時に、ツナの眼は見開かれる。

「…なん、で…?」

その疑問は解けぬまま、自分を呼ぶ声を聞き取ったツナは、意識を浮上させた。

…そして、ツナは自分達の正体を話始めた。…未だに警告を続ける、

超直感からあえて眼を反らして。

ツナは一つ一つ、順に話した。まず、自分達は未来から来たボンゴレの後継者で、ツナ自身はジョットの直系の子孫だということ。未来や継承試練の際にジョット達の事を知ったこと。そして、学校の帰りに変な空間を通過して、この時代にやって来たということ。それから全てを聞く間、ジョット達は一言も喋ることなく、ツナの話を聞いていた。

「…と、こういう訳なんです…」

「ふむ…」

一通り話し終え、場に一瞬沈黙が走る。その沈黙はほんの数秒だったが、ツナにとってはそれが限りなく長いものに感じられた。

「…つまり、綱吉は未来から来た、オレの子孫で、その二人は綱吉の…それぞれ、嵐と雨の守護者…こういう事か？」

「あ、はい。まあ…」

「…そうか…」

そう言つて黙るジョットに、ツナはやはり信じてはくれないかと、諦めかけた。その時、ジョットの手がツナの肩に置かれる。

「綱吉…」

「あ、はい。…何ですか…？」

何を言われるのかと、ツナは少し身構えるが、そんなツナを余所にジョットは呆れたような、安心したような、複雑な笑みを浮かべながら言った。

「…それならそうと、どうして最初に逢った時に言ってくれなかったんだ？そうと分かっていれば、もつとちゃんともてなしたのに。」
「全くだ。おかげでいらねえ疑いを持つちまったじゃねえか。」
「そうでござるなあ。しかし、未来からとは…不思議な事もあるものでござる。」

「ジョット達に究極に似ているのも、これで納得だ！」

「なるほど、未来からね…それならこの時代の戸籍や情報を幾ら調べても、何も出ない訳だよ。」

「なーんだ、ジョット達の隠し子じゃなかったんだ。」

「ランポウ！お前まだそんなこと…」

「まーま、誤解が解けたんだから良いじゃないすか。」

ランポウに詰め寄ろうとするGを、山本がそう言って止める。ツナはジョット達が信じてくれたことに、深い安堵の息を漏らした。

「…ということは、綱吉がどうも他人に思えなかったのも当然と言うわけか。しかし、まさか子孫だったとはな。…隠し子は無いと思っていたが、それ以上に意外な事実だ。」

腕を組み、勝手に頷きながらジョットは一人、そう言う。

「……えっ…と…」

だがしかし、こうもあっさり信じてもらえると思っていたいなかったツナは、安堵と共に多少の困惑の表情を浮かべた。

「まあ、細かい話は屋敷の中に戻ってからにしよう。あまり長く外に居ては冷えるしな。」

「あ、そうですね。」

そう言つて歩き出したジヨットとツナを先頭に、皆は屋敷の中へと戻っていく。

「ヌーン……これは流石に……いやしかし、そう考えれば……ジヨット達のことです。私と違つて何も掴めてはいないでしょう。……仕方ない、気は進みませんが、一応教えて差し上げましょうか。あの並木道がどういう場所で、そこに現れる人影の正体を。……そしてそこに足を踏み入れてしまった人間に定め付けられてしまう運命を……ね。」

……何かを掴んだスピードは、意味深な笑みを浮かべながら、ボンゴレの屋敷へと、足を向けた。

13（後書き）

更新めっちゃスローペースで申し訳ありません。今更ですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3403v/>

並木道の人影

2011年12月7日00時52分発行